212 ツツガムシの生息領域拡大要因としての風因子、並びに幼虫拡散の検討と感染潜伏期間について

堀 博 展 安田生命保険相互会社 船橋診査センター

Incubation period of Tsutsugamushi disease and roles of scattering determined by wind speed, temperature and a rainfall

H o r i H i r o n o b u

ツツガムシの伝播様式（生息域拡大）は気象条件、特に風速に依存することが示唆された。風速 3 m/s を超える気象条件直後でのツツガムシ病の多発は、ツツガムシ幼虫が風によって撒き散らされ浸淫地での感染機会を増すことを有意に推定させる。種子の形との類似は風による拡散を推定するとき、その領域拡大に及ぼす羽根付き種子の働きと同様に興味深い。また雨の後は明らかに感染例が減少し、これは雨の後数日間は晴れた日にも続く。壱岐島での1991年から1993年の風速と患者発生数の波は明瞭に一致し、その潜伏期間は6～8日最頻値7日であった。

213 福岡県におけるタテツツガムシの分布と幼虫の出現時期

北沢高司（産業医科大学生物学科教室）

Distribution of *Leptotrombidium scutellare* and the period of appearance of its larvae in Fukuoka prefecture, northern Kyushu.

Kitazawa, T.

福岡県では今のところ、タテツツガムシが採集された場所は、太宰府市を中心とした地域と県東部の周防灘に近い地域に限られている。タテツツガムシは、生態遷移の初期段階に相当するような、気象的にはきびしい場所に生息するようである。この種が乾燥地を好むという従来の常識的な解釈は、多湿な環境の指標となるオギ群落にも生息することから、正しくないと考えられる。

幼虫の出現時期は10月下旬から4月中旬までである。これは、タテツツガムシ幼虫は「南方ほど遅く発生し、長くつづく」という、佐々（1956）のまとめを支持する。ではあるが本県では、出現終了の時期が少し遅いようである。また、幼虫の出現時期は、同一地域であっても、微気象の違いで相当変化するものと考えている。